皮下植込み型除細動器植込み後，不適切作動を繰り返したBrugada症候群の1例

毛利崇人　佐藤俊明　前田明子　池脇宏嗣
勝目有美　磯谷亮太　田代身佳　百瀬裕一
野々口紀子　星田京子　冨樫郁子　上田明子
松尾征一郎　副島京子

症例は45歳男性．失神の既往なく，3親等以内の突然死やBrugada症候群の家族歴を有していないが，母および姉妹が*SCN5A*変異陽性を指摘された．姉はBrugada型心電図が記録され，42歳で洞不全症候群に対して恒久ペースメーカ植込みを受けていた．健康診断でCoved型ST上昇を指摘され精査目的に前医へ入院した．加算心電図陽性，電気生理学的検査では心室細動は誘発されなかったが，ピルシカイニド負荷後心室細動が誘発された．遺伝子検査では*SNC5A*変異陽性であり，無症候性Brugada症候群と診断された．1次予防目的の植込み型除細動器適応class Ⅱ bであり，当院を紹介され受診した．安静時の心電図スクリーニング検査適合を確認し，胸骨左縁にリードを留置するとともに皮下植込み型除細動器の植込みを行い，sensingはprimary誘導を選択した．植込み1ヵ月後に立位でシャワー中にショック作動があり，当院を受診した．除細動前後の心電図記録からT wave oversensingによる不適切作動と診断した．SensingをAlternate誘導へ変更および運動制限による対応を行ったが，翌日以降もT wave oversensingによる不適切作動を繰り返した．不適切作動による精神的負荷を考慮し，ショック後のペーシング機能を中止，SMART pass filterを導入し，運動中の心拍数モニタリングを行うよう指導した．頻度は低下したが，その後も不適切作動を繰り返したため，術後4年の電池消耗に併せて，皮下植込み型除細動器の抜去および経静脈植込み型除細動器の植込みを行った．以降は，不適切作動なく経過している．Brugada症候群において皮下植込み型除細動器による不適切作動回避が困難となり，経静脈除細動器の再植込みが必要となった症例につき報告する．

Keywords
- Brugada症候群
- 皮下植込み型除細動器
- 不適切作動

杏林大学医学部付属病院循環器内科
（〒181-8611　東京都三鷹市新川6-20-2）

Case Report of Patient with Brudaga Syndrome Repeated Inappropriate Shock After Implantation of Subcutaneous Implantable Cardioverter Defibrillator

Takato Mohri, Toshiaki Sato, Akiko Maeda, Hirotsugu Ikewaki, Yumi Katsume, Ryota Isogai, Mika Tashiro, Yuichi Momose, Noriko Nonoguchi, Kyoko Hoshida, Ikuko Togashi, Akiko Ueda, Seiichiro Matsuo, Kyoko Soejima